

1

千数百年を超える歴史を持つ京都には、文化的にも多様な顔がある。名古きよえさんはそんな京都の多様な魅力を表現できる詩人であり、画家であり、エッセイストである。それらの表現方法は名古さんにとってどれが優位ということでもないように思われる。三つの手法はどれもが切実な表現方法であり、根底で響きあっている。自分を限定することなく、主婦・子育てと職業を両立し、自分のやるべき芸術的な課題を一つひとつやり遂げてきた、ひたむきな意志力を持った表現者なのだ。

名古さんは現在まで五冊の詩集を刊行しているが、第四詩集『目的地』に「存在」という心に残る詩がある。名古さんがなぜ詩を書き続けるのかという深い願いが記されている。

存在

ここに 居る

ここで 出会い

ここで 夢見る

ここから 出かけ

ここへ 帰ってくる

いつも みんな仲良くと願い

それが ときたまに

いかにもろく崩れるかを知り

深く諦めたかと思うと

また くりかえし

なおも 夢見る

夢見た日々をふりかえり

薄い影のなかで

わたしは苦しみよりも
喜びを選ぼう

山の音ひびく 祖母の織った麻布に
しみ込ませるために

この詩は名古屋さんの芸術観が宿っている詩思想ともいえる詩だろう。「ここ」という場所に「居る」ことの不思議さと感謝を同時に感じている。「ここ」の重要性や切実さに気付くことを根底に据えて、それへの憧れを静かに物語っている。「ここ」に「みんな仲良く」という共生観が壊れかけても、名古屋さんは「深く諦めたかと思うと／また くりかえし／なおも 夢見る」のだ。さらに名古屋さんは「わたしは苦しみよりも／喜びを選ぼう」というように生きることを積極的に肯定する。生の苦悩の中に生の喜びを同時に見出し、その喜びを分かち合いたいとの思いが滲み出ている。その喜びを「祖母の織った麻布に／しみ込ませるために」とは、祖母たちの暮らしの中にあつた美意識を名古屋さんが反復し、それを生き直そうとしている決意を表していると私には思えるのだ。その意味で名古屋さんの芸術思想は、京都の暮らしに根ざしているが、さらに「用の美」の民藝運動を提唱し実践した柳宗悦とも共通性があり、多くの人々が暮らしの中で生きる喜びを感じるような芸術を目差しているのだと感ぜられる。

2

名古屋さんは、退職後の一九九〇年代から日本画を始めて、数多くの絵画を描き今まで二冊の詩画集を刊行している。二〇〇五年に刊行された第一詩画集には、カンヌ国際芸術賞2004「コートダジュール国際芸術賞」を受賞した『思い出』も収録されている。名古屋さんの絵画には、ポエジーが溢れている。この『思い出』は、朱色のワンピースを着た若い女性が、双眼鏡から覗かれたように丸い画面の中に野原の花や樹や鳥を見ている。その中心の丸い野原の背景には、世界の都市を集めたような様々な様式の建物がせり上がるように描かれている。右下には十行の詩「思い出」が記されている。空には花々、霞、雪の山々も描かれている。

一見して異空間が共存しているように思えるが、これは名古屋さんの心象風景なのであり、世界中の人々が平和で暮らしていけるような願いを込めて描かれたものだろう。その願いや思いがあったからこそ、国際的な評価があったに違いない。絵の中の詩「思い出」を引用してみる。

思い出

野の息吹は土のうた

山の高処たかみは岩のうた

命おくりものの輪をつないでいる

ぼくはトンボといっぱい遊んだ

わたしは草花と毎日遊んだ

大人になっても

野山はお母さん

どこからか

勇気と愛が

わいてくる

名古さんは、京都近郊の知井村に生れた。現在は美山町という名に代わったが、彼女は

知井という地名が消えてしまったことを、とても残念に思い、個人誌「知井」を二〇〇五年七月から刊行し続けて、知井の歴史と文化をエッセイで記している。今回のエッセイ集には、まだ書き続けている途中であることもありその連作は収録されていない。名古さんには山里である故郷「知井」の自然の光景が原点にあり、「野山はお母さん」という詩行が生み出されたのだろう。この詩の「命の輪」の「輪」に「おくりもの」というルビを振るところが名古さんの詩想の特長を言い当てていると考えられる。自然が「お母さん」であり、それは「命の輪」であるのであり、そして「お婆さんのいる風景」こそが人間が暮らしていく大切なものであると告げているのだろう。

3

今回のエッセイ集『京都・お婆さんのいる風景』は、半世紀にわたる京都市内で出会った人々との暮らしの中や旅先などで感じたこと、京都人たちが創り出してきた風景の中に見出す美意識などを書き記してくれている。名古さんの散文の特長は、あたかも風景と対話をしていて、いつしか自然の眩きようなリズムで「ここ」に在ることの充実感を共有させてくれる親密感がある。冒頭のエッセイ「お婆さんのいる風景」の中に「風景は人の暮らしの中で心身を育み、消しがたい記憶を刻む大切なものである」とある。名古さんは

この「消しがたい記憶」をエッセイの中に刻んできたのだろう。あとがきによると京都の下京区、右京区に暮らし、仕事や学校で東区に親しみを持ち、そして今は北区上賀茂を終の棲家としている。名古さんが上賀茂に引越して来た時に心に刻まれた風景として「お婆さんがゆつくりと歩く姿」があったという。

乳母車に野菜や花を入れて、畑から帰ってくるお婆さん

お餅をついて、中京へ売りに行くお婆さん

足の悪いお爺さんの手を引いて散歩するお婆さん

表に椅子を出して行き来する車を眺めているお婆さん

お正月になると庭で縄を作るお婆さん

このような風景を愛する心を名古さんは持ち続けているからこそ、読むものに「大切なもの」を静かに告げてくれるのだろう。例えば公共の駅張り、車内ポスターやテレビのCMには、若くて容姿端麗なモデルたちが満ち溢れている。この美男美女の空間が形づくっている世界はバーチャルな空間なのだが、特定の美意識の価値観を見る側に押し付けてくる。美しいものとは、与えられるものではなくて、見る側がもう一度見たくなる「消しが

たい記憶」を秘めた何かではないのかと、名古さんは現代の精神のない表層の美意識や流行に捉われた美意識に対して問題提起をしているように私には感じられた。それゆえに名古さんは、旅で出会ったギリシャのお婆さんやオーストラリアのお爺さんたちなどを通して、その国の暮らしの風景に入り込むことが出来るのだろう。

一章「お婆さんのいる風景」には、二十編のエッセイが収録されている。「街の色合い」では河原町界隈で見かけた二人の俳優について、「瑠璃色の空の下」では、旧友と巡った西本願寺、東寺、泉涌寺について、「娘と私の初詣」では、上賀茂神社と楠の大木について、「上七軒の知人を訪ねて」では、京都の昔ながらの町家に合宿する西田幾多郎研究会と町家暮らしの美意識についてなど京都人でしか感じ得ないことが、その時の息づかいのように語られている。

二章「外見と中身」には、十九編のエッセイが収録されている。冒頭の「故郷を出て五十余年」には、名古さんの学生時代のことなどが記されている。父の影響で親鸞の言葉に出会い、さらに仏教に熱心な友人によって『歎異抄』なども読むようになり、深い内容の宗教や思想書を読むようになったという。また学生時代は短編を書き、卒業し就職してからは童話を書き、結婚し再就職した後は、詩などの短詩系を書き続け、定年後は日本画を本格的に学び描いている。名古さんは「絵は私にとっては文学の続きで、別の事をして

いる気はしない。芸術は生活の中にあり、気付けば又気付かされる関係にあると思う」と語っている。このような自然体の中で詩と絵画が相互に刺激しあう関係性を持続しながら芸術を生活の中で育んできたのだろう。それら文学・宗教などへのこだわりが学生時代に亡くなった父から託された大切なものであることが私には読み取れた。章タイトルの「外見と中身」は着物姿とジーパン姿の落差に「えらい違いや」と驚いている友人の言葉から、母の着物を想起する。母は着物を着る時に楽しそうに美しく変身していった。名古さんは、母は普段着や田植えなどの労働着が地味な服だったので、着物姿がより一層美しかったのではないかと推測していく。しかし名古さんは母の普段着の中にあつた「ひかえめの美」を今になり強く感じている。

また京都の詩の朗読会「ほんやら洞」で出会った片桐ユズル氏などの詩人たちとの交流を記した二編のエッセイなども貴重な証言となっている。

三章「ミカンの平和」には、十八編のエッセイが収録されている。冒頭の「詩と宗教」には、名古さんが突き詰めた詩論であり芸術論がエッセイの中に秘かに記されている。「私は無神論者ではない。生命あるものなら感じる無限の闇、その彼方から生まれる霊的なものを感じる。いかなる命も有限である故に、無限と有限の吃音のようなもの、それをキャッチして育てるのが詩であるのかと思う。」名古さんの根底にはこのような詩的な精

神があるからこそ詩やエッセイや絵画が溢れるように表現されてきたのだろう。章タイトルのエッセイ「ミカンの平和」には、作家の吉岡忍氏の講演を聴き、『アフガニスタンの駅で寝ていると深夜三時位に必ず眼が覚める。なぜならこちらから戦争で心に傷を負った子供や大人たちが狂ったように叫びだす』からだという、戦争の痛切な話に、名古さんはそんなアフガニスタンやイラクの子供たちの苦しみに思いを馳せて、ミカンを送って食べさせたいと願うのだ。そのミカンとは戦争が終わり、自分たちの国土で平和の象徴である果物を育てる日を心から願っているからだろう。

京都の多様な歴史と、変化発展する文化のなかで、京都で暮らすことを大切にするエッセイを多くの人びとに読んで欲しいと願っている。